

令和 4 年 5 月 27 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00791

研究課題名(和文) 英語授業内活動における認識性交渉の会話分析とタスクデザインの提案

研究課題名(英文) Conversation analysis of epistemics in EFL activities and a task design proposal

研究代表者

遠藤 智子 (Endo, Tomoko)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：40724422

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は会話分析の手法を用いて大学の英語授業内活動のグループワーク等の参加者が協働的に活動する学習活動の実態を捉えた。対峙しているタスクの内容や設問への解答に対して参加者が異なる見解を持つ場合に参加者たちがどのように交渉して統一した理解へと達するのか、もしくは共通理解に達しないまま次の設問へと移行するのかを、実際の活動の様子をビデオ撮影したデータの詳細な分析により検討した。その結果、質問のタイミングや形式とその応答、理解候補の提示の仕方の言語表現、意見提案時の言語表現、語句の不理解や意見の対立、タスクへの取り組み態度の交渉、共通の学習体験への志向等の様々な特徴を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

一般的に学習は個々の学習者の頭の中で起きる個人的・認知的な現象と思われがちであるが、授業内でグループワークに参加する際には、他の学習者との協働の中で学習に取り組む。その中では、他の相互行為と同様に、参加者間の立場の調整が起き、一人で問題に取り組む際には見られない様々な現象が観察される。初等教育から高等教育までどの段階でも対話的な学びの重要性が意識されている一方で、対話場面に特有の、他者への配慮が学びの阻害要因となりうることに着目し、配慮が実際にどのような形で現れるのかを実際の録画データの詳細な分析に基づいて記述することにより、本研究は今後の様々な授業内活動をデザインするうえでの基盤を提供した。

研究成果の概要(英文)：This study attempted to capture the actual situation of learning activities in which participants engage in collaborative activities, such as group work in a university English class, using the method of conversation analysis. By analyzing video data, we examined how participants negotiate to reach a unified understanding when they have different views on the content of the task or answers to the questions, or how they move on to the next question without reaching a common understanding. We were able to identify a variety of characteristics, including the timing and form of questions and their responses, linguistic expressions of how to present candidate understandings, linguistic expressions when proposing opinions, incomprehension of words and phrases and conflicting opinions, negotiation of attitudes toward the task, and orientation toward a common learning experience.

研究分野：相互行為言語学、会話分析

キーワード：認識性 授業内活動 同調性 消極性 協働 英語学習

## 1. 研究開始当初の背景

大学における英語教育では、「対話的・主体的」な学びを実現し、実践的な英語能力を涵養する機会を与えるために、学生同士のペアやグループでの活動が多く取り入れられている。しかし、ペア/グループワークは常に円滑に進行するわけではなく、学習者の消極性や同調性により活動が停滞し、結果として学びが妨げられることも多い。その原因のひとつは「認識性 (epistemics)」への配慮である。

やりとり(相互行為)に参加する人々の中で、誰が、何を、どの程度知っているのか、知っている権利・義務を持つのか、など、知識の相対的な配分への配慮は認識性と呼ばれ、会話分析の分野において近年強い関心を集めている。研究が蓄積されていくなかで、相互行為において人々はその配慮を発話の形式やタイミングによって示すことが明らかにされてきたが、外国語学習の場面においては、日常会話とは異なる要因がはたらく。すなわち、認識性が「学習者として知っているべき内容に関する自分の無知を露呈したくないため、わからないことでも質問しない」という消極性や「他の学習者にわからない内容を自分だけがわかっていると示すことをためらうがゆえに、わかっているても発言しない」という同調性につながり、結果として学習活動の停滞が起きがちである。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、大学英語授業内活動の参加者に見られる消極性や同調性等の実態を「認識性」という切り口から明らかにし、効果的なペア/グループワークのデザインを提言することである。特に、以下の問いを追求する。(1)与えられた授業内課題にグループやペアで取り組む際、認識性に対する学習者の配慮はどのようにやりとりを阻害しているのか。(2)認識性の配慮によるやりとりの阻害はどのようなタスクデザインによって解決できるのか。これらの問いに答えることで、学生がより対話的・主体的に学ぶ環境を整えることができる。

## 3. 研究の方法

本研究は大学の英語授業内活動をビデオ撮影し、会話分析の手法を用いて授業参加者のふるまいを発話内容・身体動作・韻律的特徴等の諸側面に関して詳細に分析する。そのような質的分析を通じ、グループワークやペアワークにおいて認識性、すなわち「誰が、何を、どの程度知っているのか」ということへの配慮がどのように学生の消極性や同調性につながり、結果として学習活動を停滞させているのかを明らかにする。本研究は以下の3ステップで行う。(1)学習者の認識性交渉に関する特徴の抽出 (2)条件統制をしたタスクによる認識性交渉の阻害・補助要因の検証 (3)各メンバーによる発展的研究(学習者のメタ認知と行動、韻律的特徴、質問デザイン、協働的推論、自発性発現プロセス)。研究成果は大学英語授業内活動のタスクをデザインするにあたってのガイドブックとしてまとめ、教育実践への提言を行う。

## 4. 研究成果

初年度である2018年度は、メンバーがそれぞれの所属機関において倫理委員会に研究遂行のための申請をし、データ収録の許可を得たうえでデータ収録を開始した。収録したデータの一部は書き起こしを開始し、データセッションをグループメンバーのみで2回、関連する他プロジェクトの研究会にて2回行った。また、会話分析の立場からの第二言語習得および言語社会化についてのサーベイ文献を読み、当該分野の研究動向について理解を深めた。

2019年度は前年度に撮影した英語学習活動データの分析を進めるのと並行して、新たなデー

夕撮影も行い、合計約14時間の新規データを収録した。各自で分析を進めつつ、データセッションを行って分析内容を検討した。研究代表者は2019年度より所属機関の変更があったため、倫理委員会の承認を得たうえで秋学期から新たなデータ撮影を行った。このことにより、更に多様種類の学習場面をデータに収めることができた。6月には香港の香港理工大学にて開催された国際語用論学会にて各自の研究発表を行ったほか、本研究課題に関する発表の聴講をして知見を得た。様々な種類の活動に関し、認識性についての研究やマルチモーダルな分析を行う研究が数多く発表されており、本研究課題のアプローチも国際的な潮流の中に位置づけられることを再確認した。11月に京都で行われた日本語用論学会では本科研のメンバーでワークショップ「英語学習活動の相互行為における知識や理解の交渉」を企画し、多くの来場者とともに活発な議論を行ったのち、プロシーディングスに分析結果をまとめた。国内においても、本研究課題は研究者の強い関心を集めるものであることが明らかになった。具体的には、大学英語授業内活動における学習者同士のグループワーク、あるいは対教師による相互行為の分析によって、(1)参加者が互いに相対的な認識的地位を基盤として、具体的な活動への参加のための枠組みを交渉していること、(2)会話相手と認識的スタンスを調整し表明することで様々な社会的行為を達成し、授業内活動を展開していること、(3)その結果、一見停滞しているとみられる学習活動もこれらの交渉や配慮の結果であるため、学習活動の進行にとっては寄与するものであることなどを明らかにしつつある。このような知見は、アクティブラーニングが求められている大学英語授業のための具体的な英語学習活動を組み立てる上で資することが期待されるものである。

2020年度はコロナウイルス感染症のため大学では対面授業が行われず、新しいデータを収録することはできなかった。しかし、オンラインによるデータセッションを行うことで、収録済みのデータに関しては今までよりも多くの分析を行うことができた。このことにより、異なる種類のクラス内アクティビティにおいても、解答や英文理解について提案した学生がその提案をすぐ自分で却下したり、提案に自信がないというような認識的態度を表明することが繰り返し起きていることが確認された。2021年2月には日本女子大学との共催でConversation Analysis of English Learning Activities（英語学習活動の会話分析）と題した国際ワークショップを開催した。韓国・ソウルの成均館大学のYujong Park氏をゲストに迎えて Using Conversation Analysis in the Investigation of ELF Classroom Interaction among Multilingual Studentsという招待講演を行ったほか、科研メンバーは Possible Application of Conversation Analysis to Language Teaching/Learning（増田）、Epistemics in Everyday Conversation and Epistemics in Language Classroom（早野）、Epistemic Downgrading in Proposal Sequence: Cases from EFL Classroom in Japan（黒嶋・遠藤）という発表を行い、全体討論も行った。会話分析の研究者も多く参加し、時間を延長して活発な議論をすることができた。

2021年度は前年度に引き続きコロナ禍であったため、オンライン授業が主体であり新規のデータ収集は実施できなかったが、収集済みのデータに関して定期的なデータセッションをオンラインで行い、分析を行った。分析結果をまとめて各自の所属機関の紀要等に投稿したほか、12月にはJAAL in JACETにて4名が、「大学授業内グループワークの会話分析研究」という共通テーマで研究発表を行った。発表内容はプロシーディングスの形で3月に出版された。遠藤は、取り組んでいる課題に対して学生が理解に問題があることを表明する場面に注目し、どのように学生間で質問がされたり、意見の対立がやりとりの中で解消するのかを分析した。黒嶋は、グループでタスクに取り組む際、学生は全員で統一された「正解」を出すことに志向しな

がら、各自で考えた解答候補をどのようにグループメンバーに対して提案しているのかを分析した。増田は、読解グループワークの阻害要因を指摘し、解決策としてワーク開始時点で語句の導入や学生の意見の共有を行うことを提案した。早野は、グループのメンバーが英語で話すということ、タスク内容にどのような態度で取り組むのかを交渉するやりとりの連鎖構造を記述した。横森は文法問題のグループワークにおいてしばしば観察される、「(実際には別々の機会に学習を行ったにも関わらず)共通した学習経験を持っているはずであるという認識的態度を示す」発話行動の分析を行い、動的語用論研究会にて発表したのち論文にまとめ所属機関の紀要に掲載した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計15件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 8件）

1. 著者名 Endo, Tomoko & Daisuke Yokomori	4. 巻 -
2. 論文標題 Self-addressed questions as fixed expressions for epistemic stance marking in Japanese conversation	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Fixed expression in interaction: Building language structure and social action	6. 最初と最後の頁 203-236
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1075/pbns.315.08end	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 増田将伸・鈴木陵・清水菜未	4. 巻 11
2. 論文標題 必修英語科目におけるアイスブレイクの探索 継続的な教職連携による考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 高等教育フォーラム	6. 最初と最後の頁 43-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Miharu Fuyuno, Takeshi Saitoh, Yuko Yamashita, and Daisuke Yokomori	4. 巻 14
2. 論文標題 Gaze-Point Analysis of EFL Learners while Watching English Presentations: Toward Effective Teaching	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 International Journal for Educational Media and Technology	6. 最初と最後の頁 17-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 鈴木右文, クリストファー・ハズウェル, スティーブン・レイカー, ショーン・オドワイヤー, 大橋浩, 田中俊也, 浜本裕美, 横森大輔	4. 巻 71
2. 論文標題 新学術英語プログラムにおける英作文・プレゼンテーション教材	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 英語英文学論叢	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 遠藤智子	4. 巻 15
2. 論文標題 ワークショップ「英語学習活動の相互行為における知識や理解の交渉」イントロダクション	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本語用論学会第22会大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 213-214
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 増田将伸	4. 巻 15
2. 論文標題 正解到達型グループワークにおける解答の不一致への対応	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本語用論学会第22会大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 215-218
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 黒嶋智美	4. 巻 15
2. 論文標題 知識の確認デバイス: 「て(いう)こと」による理解候補の提示 英語学習活動の相互行為における知識や理解の交渉	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本語用論学会第22会大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 219-222
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 横森大輔	4. 巻 15
2. 論文標題 リンガ・フランカとしての英語使用場面における断片的発話と認知的スタンスの調整	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本語用論学会第22会大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 223-226
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 早野薫	4. 巻 15
2. 論文標題 英語個人面談における多層的「知識」のマネジメント	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本語用論学会第22会大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 227-230
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Endo, Tomoko	4. 巻 0
2. 論文標題 Embodying stance: wo judee 'I think' and gaze	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Li, Xiaoting and Tsuyoshi Ono (eds.), Multimodality in Mandarin conversation	6. 最初と最後の頁 148-178
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 遠藤智子・高田明	4. 巻 0
2. 論文標題 家庭内の共同活動における子どもの指さしと養育者の反応	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 安井永子・杉浦秀行・高梨克也(編)『指さしと相互行為』	6. 最初と最後の頁 161-189
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Endo, Tomoko, Anna Vatanen & Daisuke Yokomori	4. 巻 21巻第1号
2. 論文標題 Agreeing in overlap: A comparison of response practices and resources for projection in Finnish, Japanese and Mandarin talk-in-interaction	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 社会言語科学	6. 最初と最後の頁 160-174
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 横森大輔	4. 巻 1
2. 論文標題 グループの外の声を聞く：大学英語授業内グループワークの相互行為分析から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 村田和代（編）『聞き手行動のコミュニケーション学』ひつじ書房	6. 最初と最後の頁 111-133
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 増田将伸	4. 巻 1
2. 論文標題 ずれた発話をどう「聞く」か：授業内グループワークの参与者による「受け流し」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 村田和代（編）『聞き手行動のコミュニケーション学』ひつじ書房	6. 最初と最後の頁 91-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 早野薫	4. 巻 20
2. 論文標題 レヴィンソンが牽引するインタラクション研究	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 語用論研究	6. 最初と最後の頁 160-167
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計24件（うち招待講演 2件／うち国際学会 14件）

1. 発表者名 Masanobu Masuda
2. 発表標題 Possible Application of Conversation Analysis to Language Teaching/Learning
3. 学会等名 Conversation Analysis of English Learning Activities（国際学会）
4. 発表年 2021年



1. 発表者名 Epistemics in Everyday Conversation and Epistemics in Language Classroom
2. 発表標題 Kaoru Hayano
3. 学会等名 Conversation Analysis of English Learning Activities (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Satomi Kuroshima & Tomoko Endo
2. 発表標題 Epistemic Downgrading in Proposal Sequence: Cases from EFL Classroom in Japan
3. 学会等名 Conversation Analysis of English Learning Activities (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 黒嶋智美
2. 発表標題 医療記録を「読むこと」の会話分析
3. 学会等名 第45回日本保健医療社会学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Endo, Tomoko
2. 発表標題 Membership and participation: Child as a resource for interaction between in-laws in Japanese casual conversation
3. 学会等名 国際語用論学会 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Masuda, Masanobu & Yokomori, Daisuke
2. 発表標題 Self-talk Creating a Participation Framework: Reading Text Aloud in Class Activities
3. 学会等名 国際語用論学会 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kuroshima, Satomi
2. 発表標題 Accommodating the construction of request turn to the timing of compliance: In case of an immediate request in Japanese service encounters
3. 学会等名 国際語用論学会 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hayano, Kaoru
2. 発表標題 Off-stage negotiation of who is going to serve:Resources for embodying requests and offers
3. 学会等名 国際語用論学会 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kuroshima, Satomi
2. 発表標題 Dealing with surgical uncertainty: Acknowledging, accounting, and calibrating for the procedures of surgical operations
3. 学会等名 国際エスノメソドロジー・会話分析学会 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Endo, Tomoko
2. 発表標題 Bodily behavior as constructional meaning: The case of benefactive construction in Japanese family interaction
3. 学会等名 国際認知言語学会 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 遠藤智子
2. 発表標題 認識動詞を用いた話し手の態度表明：認識的モダリティと認識的スタンス
3. 学会等名 日本英語学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 遠藤智子
2. 発表標題 英語学習活動の相互行為における知識や理解の交渉：イントロダクション
3. 学会等名 日本語用論学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 増田将伸
2. 発表標題 正解到達型グループワークにおける解答の不一致への対応
3. 学会等名 日本語用論学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 横森大輔
2. 発表標題 リンガ・フランカとしての英語使_場_における.断_的発話と認知的スタンスの調整
3. 学会等名 日本語用論学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 黒嶋智美
2. 発表標題 知識の確認デバイス：「て(いう)こと」による理解候補の提示
3. 学会等名 日本語用論学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 早野薫
2. 発表標題 英語個人面談における多層的「知識」のマネジメント
3. 学会等名 日本語用論学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Endo, Tomoko, Anna Vatanen & Daisuke Yokomori
2. 発表標題 Cross-linguistic investigation of projection in overlapping agreements to assertions
3. 学会等名 5th International Conference on Conversation Analysis (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Masanobu Masuda & Ayami Jo
2. 発表標題 Display of Not Knowing for Involving Peers: A Modest Proposal Practice in Group Activities in a Japanese Classroom
3. 学会等名 5th International Conference on Conversation Analysis (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Chen, Li, & Daisuke Yokomori
2. 発表標題 Display of understanding by understanding check: A study of Japanese utterance-final use of the quotative particle TO
3. 学会等名 5th International Conference on Conversation Analysis (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Hayano, Kaoru
2. 発表標題 Becoming a good parent: Epistemics in daycare teacher-parent interaction
3. 学会等名 Self-Other Relations in Interaction Symposium (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Endo, Tomoko, Anna Vatanen & Daisuke Yokomori
2. 発表標題 Two levels of projection: cross-linguistic investigation of agreeing overlapping response
3. 学会等名 The 3rd International Conference on Interactional Linguistics and Chinese Language Studies (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kuroshima, Satomi
2. 発表標題 Perception in the Work of Identification of Human Anatomy: A Case of Medical Reasoning in Surgical Operations
3. 学会等名 113th Annual Meeting of the American Sociological Association
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 遠藤智子
2. 発表標題 参与構造の類型について：日常会話コーパスを用いたボトムアップのアプローチ
3. 学会等名 シンポジウム『日常会話コーパス IV』（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 増田将伸・横森大輔
2. 発表標題 言葉の読み上げによる参与構造の創発 授業内グループワークの事例から
3. 学会等名 シンポジウム『日常会話コーパス IV』
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 平本毅・横森大輔・増田将伸・戸江哲理・城綾実	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 300
3. 書名 会話分析の広がり	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

## 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	早野 薫 (Hayano Kaoru) (20647143)	日本女子大学・文学部・准教授  (32670)	
研究分担者	黒嶋 智美 (Kuroshima Satomi) (50714002)	玉川大学・ELFセンター・助教  (32639)	
研究分担者	増田 将伸 (Masuda Masanobu) (90460998)	京都産業大学・共通教育推進機構・准教授  (34304)	
研究分担者	横森 大輔 (Yokomori Daisuke) (90723990)	京都大学・国際高等教育院・准教授  (14301)	

## 7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 International Symposium Conversation Analysis of English Learning Activities	開催年 2021年～2021年
--	--------------------

## 8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関